

題字 寺山 且中

色紙に書く 座右の銘

小原 二郎

「塔組みは木組み
木組みは木のくせ組み
木のくせ組みは人組み
人組みは人の心組み」



小原 二郎 (こはら じろう)
千葉大学名誉教授。大正5年(1916)長野県生まれ。京都大学卒業。京都府立大学助教授。千葉大学教授。同工学部長を経て現在、千葉大学名誉教授。千葉工業大学教授。常任理事。専攻は人間工学、住宅産業、木材工学。日本インテリア学会名誉会長。監修『建築』、日本建築学会賞、助工等瑞宝章、みどりの文化賞、日本建築学会賞など受賞。医学博士。著書は『日本人と木の文化』、『インテリア学辞典』、『インテリア大事典』、『人間工学からの発想』など。

これは故・西岡常一棟梁から教えていただいた教訓である。法隆寺宮大工だった西岡氏は昭和最後の宮大工と呼ばれ、文化功

労者になられた方だから、今更ここに紹介するまでもあるまい。だが私にとっては、実学の生涯の師であった。棟梁は平成七年に八十六歳で逝去されたが、みどりの文化賞が生まれた翌年に、「木の文化」の伝承で賞を受けられた。不肖の私はそれより十五年遅れて、「木の文化の研究」で同じ文化賞をいただいた。ようやく面目が立って、ほ

っとしているところである。

ご承知のように、西岡氏は子供の時から、祖父に法隆寺の建築現場に連れて行かれ、徹底した「体で覚える」式の教育を受け、飛鳥の匠の技術を身につけたことで有名である。思うに標記の教訓は、西岡棟梁が一人で考え出した言葉ではなくて、法隆寺の建立以来、千数百年の間に社寺建築に従事した何千人もの宮大工が、師匠から無言のうち受け継いできた体感を、誰かが分かりやすい言葉でつなぎ合わせて名文にした

ものだろうと思う。

私がそのように想像するのは、この教訓の裏付けになる次のような幾つもの言葉を棟梁から教えてもらったからである。
「木は寸法で組まずにくせで組め」
「丸太を割って柱にする時は、南側半分の材は建物の南側に、北側の半分の材は建物の北側に使え」
「木だけ使って組むなら千年持つものを、鉄と組んだら百年で腐る。木の敵は鉄だ」といったような注意である。

そういった戒めの言葉を含めて、ある知恵者が標記の四行の文章に凝縮したのである。いずれにしても私の大好きな教訓だ。西岡棟梁と私との交流は次のようにして始まった。

昭和四十二年に私は拙著『木の文化』を書いた。幸い好評で、新聞や雑誌の書評に取りあげられた。NHKは特別番組を組んで、東京と大阪で放送してくれた。その時、大阪では西岡棟梁に対談をお願いした。そ

法隆寺宮大工
口伝

塔組みは木組み

木組みは木のくせ組み

木のくせ組みは人組み

人組みは人の心組み

小原二郎

んな縁から、共著の『法隆寺を支えた木』（NHKブックス、昭47）が生まれた。この本はその後、中学校と高等学校の国語教科書に採用されて、二十年近く使われたが、その中に標記の口伝を紹介したので、広く知られるようになった。

また全く思いがけないことだったが、昭和六十年には西岡棟梁と共に皇太子・同妃殿下（現天皇・皇后陛下）に木の文化についてご進講申しあげる光栄にも恵まれた。

私たちは何か仕事を成し遂げようとする時、何人かの人に協力してもらわなければならない。参加してくださる方は、一人ひとりの顔形が違うように皆違った性格と考え方を持っている。その組み合わせがうまくいかなければ、仕事は成功しない。

ところが私たちのように研究に従事する者は、人と組み合う現場体験が少ないから、とかく知識だけの抽象的な案を立てて事を進めようとする。それはしばしば「畳の上の水練」のような、実現性の乏しい計画で失敗することが多い。棟梁から習ったこの実学的知恵を身につけたいものだと思っている。

164ページの色紙にプレゼントの所載文章が載っています。